

経済学博士根岸佶君の「中国のギルド」に対する授賞審査要旨

八

本書は著者多年の研究成果であつて、第一篇総説、第二篇同郷団体、第三篇経済団体の三篇から成つてゐる。

第一篇の第一章緒論においては、前著支那ギルドの研究に披瀝した見解の一部を訂正し、新たに宗教的、社会的団体としての古ギルドと、同郷団体、経済団体としての新ギルドとの別を立て、その起源を単一に認めることの不可なることを説いている。第二章においては、ギルドと国家、ギルドと公共觀念、小幫分立と大同團結、位階体統と階級問題、事業独占と競争制約、ギルドと政治の六節に別ち、諸家の見解に対して具体的事実を挙げ所見を述べてゐる。

第二篇は同郷団体の研究に充て、第一章においては、愛郷心と同郷団体、會館の沿革、客商と商業ギルドの節に分けて史的発展の概観を試みている。第二章客商においては、清代の有力な客商団体としての山西幫、三江幫、福建幫、廣東幫について詳説し、それらの興亡推移を明かにした。第三章以下第六章では、同郷団体たる會館の設立、組織、職能、會計について述べ、第七章においては変法自彊後の民主主義の抬頭と共に、貴族的性格をもつ會館に代つて成立を見た民主的な同郷会の組織、職能等を説き、會館と同郷会との異同を明かにしている。第八章海外における同郷団体では、海洋貿易とギルド、南海貿易と閩粵ギルド、台湾貿易と福建ギルド、日本貿易と浙閩粵ギルド、漢民族の海外発展の節に分けて、華僑の海外発展の経過とそのギルド的結束の実例を挙げ、華僑の最近までの政治的動向を説いている。本篇の結論においては、客商団体が地元商人化し、民族主義の抬頭により同郷団体が團結して、超郷党的超職業的連合団体としての中華會館、華僑總會等の設立を見るに至つたことを指摘し、同郷団体にして経済団体としての

職能を果すものにあつては、分解して会館は古ギルド化し、別に經濟団体として新商ギルドを設立するに至つた経過を明かにしている。

第三篇經濟団体については第一章において、その萌芽時代から唐宋時代、清代、国府時代を経て、中共治下に及んで封建的遺制として打破の傾向があるに至つたまでの史的發展を概観している。第二章では商ギルドの組織について、その種別、会員、執行機關、會議等を説き、巨舖専制から民主的趨勢に向つて来た道程を明かにした。第三章商ギルドの職能については、同郷団体たる会館が古ギルド的職能を中心とするに對し、商ギルドにおいては經濟的な業務規定の制定とその勵行を中心とするとし、信用維持、業務規約、共同事業、警察調停裁判および処罰、共同防衛の五項目について述べている。第四章においては、工商同業公会についてその史的發展を述べ、同業公会法の制定、同業業規の法律化、會館公所と公会の相違を明かにし、古ギルド的伝統のなお残存することを説いている。第五章商ギルドの命運については、その衰運の久しいに拘らずなおその情性の強いこと、上海事変以降のギルド自救策を述べ、中共時代に入つてギルドは遂に廃止されるか、或は如何に改造されるかは、之を將來の事實に徴するの外なからうと結んでいる。

本書において著者が特に重きをおいたと認められる点として、次の如きことを指摘し得るであろう。

その一は商人階級の団結が中国の歴史上にもつ意義を明かにしたことである。中国では古來士農工商の別が明かで、士は治者階級に農工商は被治者階級に属した。然るに商人は貿易によつて巨利を博し往々王侯を凌ぐものがあるに至つたので、漢代治者階級は政權の商人に移ることを慮り抑商政策をとつた。商人は智と富とを傾けて之に對抗し

官僚に対して隠然たる勢力となつた。清末内外の形勢に制せられ、政府は保商政策に転じたので商人の勢力は遂に朝野を動かすようになった。これは商人が多年の努力により治者階級から解放されたことを示すものであつて、中国の歴史上意義あることである。その原因は種々あるが、唐宋以降商人の結成したギルドに負う所大である。著者はこの点に鑑み商人階級の団結たるギルドに重きをおいて本書を著した。

その二は問屋ギルドの地位を重視していることである。古来中国においては法制上習慣上問屋を通じて売買するために、問屋は商品の生産流通を支配するに至つた。しかし問屋は鞏固なギルドを結成していたので、その規約は概ね商品の生産流通を統制する規範となつた。かくて中国において問屋ギルドは商工業ギルドの首領たる傾きがあるが、中共治下においては、財貨が生産者から居間商の手を通ずることなく、直ちに消費者の手に帰することを以て經濟政策となし、問屋および問屋ギルドを圧迫した。本書においては問屋ギルドが古今に亘り中国において一大勢力たることに顧み、商人ギルド中特に問屋ギルドの研究に力を注いでいる。

その三は同郷団体の重視すべきことを説いていることである。欧米の中国ギルド研究者は往々同郷団体を軽視するものがあるが、中国人は郷党の觀念強く、郷党によつて団体を結成するのを常とする。殊に水陸行商に長ずる浙閩粵人の如きは内外至る処鞏固なる郷党を結成する。彼等は郷党により全市に通ずる商工ギルドを独占するのみでなく、数郷党の連合によつて商工ギルドを構成するものが多い。郷党は通例県を単位とするが、必要に応じて逐次高次の団体を組織し勢力の増強に努める。その海外にあるものは郷党の異同を問わず中華會館や中華總商會を組織し、在留華人の權益を保護するのみでなく、内外華人団体と呼応して本国の内治外交にも干与する。中国ギルドの研究には同郷

団体を閉却するを得ないのであつて、本書においては詳細にその研究に努めている。

その四はギルドの職能について詳説していることである。中国の商工ギルドは同業の利益を保護増進せんとするのであるから、その主眼の目的が経済的なることは言うまでもない。しかし彼等は一方においては古ギルドの職能たる会員の親睦、宗教の行事、相互の扶助を図り、他方においては国家の職能たる警察、調停、裁判、処罰等を行い共同防衛に努める。当初ギルドは寡頭専制の嫌いを免れなかつたが漸次民主的に赴き、民主的共同自治団体たらしむる勢を生じた。多くのギルド研究者はこれらの職能を以て集団の力により各自の利益のみを図るものであつて、他の不利を顧みないものとするを例とする。しかし斯くの如きは中国において比較的勢力ある輿論や道教道德の許さない所である。彼等は率先して社会福祉に貢献することを努め、最近では往々相互に連合して政治に干渉するものがあるようになった。彼等が古今にわたり中国に及ぼす影響は決して少くないので、本書においては詳細にその職能を検討している。

その五はギルドの近代化にも論及していることである。ギルドは西洋において中世に栄え近世国家の建設と共に滅びたが、中国においては西洋に先だつて生じ、清末以降数次の革命を経たるに拘らず今なお命脈を保っている。変法自強以来故法旧慣を改めて欧米の法制を用うることになり、商工業ギルドに対しても西洋の同業組合に換えようとして工商同業公会法を制定したが、その本質はギルドたるを失わなかつた。中共は伝統打破の方針をとりギルドを廃止しようとして、所在公会の解散を命じたが、物資の収集と分配に苦しみ公会の再興を許し、租税の徴収、公債の募集などにつき公会の協力を求めている。また抑商政策をとり、商工業の国营を盛んにし、協同組合を興しているが、今なお商業の大部分は商人の手に歸している。このように中国商人の強靱なものと、商業ギルドの惰性の根深いことに鑑

み、著者はギルドの近代化について注意を払っている。

中国には治者階級に属する文献は多いが、被治者たる商工業者のギルドに関する文献は甚だ少い。ギルドにおいてもまた文筆に短なるものの集りとして記録も多くなき、しかも内乱外患の頻発によつて焼失し残存するものが甚だ乏しい。故に中国ギルドを研究するものは、正確な文献特にギルド自らの文献に基いて検討することが困難で、勢い西洋のギルド学説に拠り概論する傾きがないではない。ギルドの実態調査を試み、ギルド自らの文献を吟味して論述するものも、北京、蒙疆、福建、台湾、日本等の一地域に研究を局限するものが多い。

著者は清季上海に寓居すること七年、各種のギルドを調査し、その文献の蒐集を怠らなかつた。また多年中国各地のギルドを歴訪し、新嘉坡、長崎、神戸、大阪など在外中国ギルドを見聞し、その文献を渉獵して詳密に研究した。然る後著者は内外の著書を参照し、それらを綜合してギルドの実相を見出すに努めたが、必ずしも泰西の学説に囚われることなく独自の見解を展開している。中国人生活の根幹をなすギルドについては固より、それを通じて中国経済の実態を究明する上に、本書は甚だ卓越した研究と称してよい。

著者は東亜同文書院在職当時、清国商業綜覧全五巻、支那経済全書全十二輯の編集に従事して具さに中国の社会経済の実態に通じ、爾來五十年常に中国経済の研究に終始した。昭和七年「支那ギルドの研究」を著し、昭和十七年には山田三良博士を委員長とする東亜研究所中国慣行調査委員会のために商事に関する慣行調査報告書として「合股の研究」を執筆した。昭和二十二年には「中国社会における指導層」を、次で翌二十三年には「買辦制度の研究」を著した。何れも著者が中国経済の研究について該博の識見を有することを示したものである。昭和二十六年には新たに蒐集した豊

富の資料に基き「上海のギルド」を、さらに二十八年四月「中国のギルド」を著し、著者の撓まない努力を示している。中国経済の重要な問題がこれによつて解明せられ、この方面の研究にとつて貴重の史実が集成された点において、その学問的業績は大なりと言わねばならぬ。著者は齡八十にして研究の意慾なお壯者を凌ぐものがあり、学界のために甚だ推賞すべきものと信ずる。